

国際バカロレアMYPにおける鑑賞教育の研究 (3)

小池 研二

Art Appreciation Education Based on International Baccalaureate Middle Years Programme (3)

Kenji KOIKE

I はじめに

本論は東京学芸大学附属国際中等教育学校（以下学芸国際中）で2007年度に実施された美術鑑賞授業についての実践研究である。この鑑賞授業は国際バカロレアMYP：中等教育課程¹⁾（以下MYP）カリキュラム実施を前提に行われた。学芸国際中は2007年度に第1回生を受け入れ、MYPの考え方を取り入れたカリキュラムを実施している。学芸国際中美術科では前身の附属大泉中学校の時からMYPカリキュラム導入を視野に入れ、実践研究を行っている。筆者は2007年度まで同校に勤務し美術館などの学校外の施設と連携した美術の授業に関して、学芸国際中紀要等²⁾にその研究成果を発表してきた。MYPを視野に入れた鑑賞活動を中心とした授業研究は、地域の美術を中心としたもの、東京都現代美術館での活動を中心としたもの、と段階を経ている。本論は以上のような経緯を経て行ってきた鑑賞活動のうち2007年度に実施した東京国立近代美術館（以下東近美）での活動についてまとめたものである。東近美の活動が大きく分けて3つめのMYPカリキュラムを考慮した鑑賞教育実践研究であり、本論の表題とした。³⁾

II 活動の概要

1 フィールドワーク1の中の鑑賞活動

活動は学芸国際中1年生を対象に行われた。国際中等教育学校として初めて迎え入れた生徒である。迎え入れる側も組織が大きく変化して慣れない面もあり、準備に関しては前年度から綿密に行われた。特に美術科だけでフィールドワークを実施することはほとんど不可能であり、1年担任団及び教務部と連携して計画していった。1教科で行うものではなく、学年全体の活動と捉えることにより、教員の配置や実施日程、時間割等の諸問題をクリアすることができた。中学校では、学年全体で活動することが普通なため教科単独で計画を立てることが困難だからである。今回の実施でこの点をクリアできたことは、その後の他教科の活動にも良い経験となった。実際にその後2学期にも他教科中心の校外学習を実施した。

本活動は前述したように美術科だけの活動としなかった。学年全体の学習活動＝フィールドワーク1と位置づけ1日を使って校外で活動した。特に今回は数学科と共同し、東近美と理系の社会教育施設であるリスーピア⁴⁾との合計2カ所での活動となった。MYPでは教科をこえた学習活動を重視しておりまさにMYPをにらんだ活動となった。

活動日は2007年5月11日金曜日で、1年生4学級105名全員が参加した。学芸国際中は帰国生及び外国籍生徒に対しての教育も行うやや特別な学習環境の学校であるため、1学年の定員は120名（4クラス＝1クラス30名）と少なく設定されている。途中編入も考えているため1年生入学時の人数は105名である。当日は2クラスずつ2つのグループに分けて行動した。午前には東近美で活動し、午後はリスーピアへ行くグループとその逆の活動をするグループである。1グループは52～53名であった。東近美ではそれをさらに4グループに分けて活動したため13～14名という人数での活動となった。これは鑑賞活動を行う上では良い条件と思われる。特に学年全体で行う場合はもっと大人数になることが一般的であり、その意味では恵まれていると言えよう。

美術館での鑑賞活動は集合から解散まで90分間であった。もう少し多くの時間がとれば良かったが、当日のスケジュール面からは、これが限界であった。午前中に東近美で活動する2クラスの生徒は飯田橋駅に集合、一方午前中にリスピーアで活動する2クラスの生徒は新木場駅に集合した。午後はそれぞれもう一方の施設で活動をし、16時20分に新木場駅及び飯田橋駅で解散となった。

Ⅲ 東近美での活動の詳細

1 活動の目的

今回の東近美での活動の目的は以下の3つである。

- ①作品に対して自由に考え自分の考えを述べることにより独自の批判的思考、問題解決能力を養う。

(Approaches to learning)

- ②鑑賞活動を通して、美術作品を創造していく芸術家のことや、人間が作品を作りあげることの意味を考える。(Human ingenuity)

- ③解説ボランティアと鑑賞活動をおこなうことにより奉仕的精神を学ぶ。(Community and service)

これらの目的はMYPのプログラムに関連して立てられた。MYPカリキュラムの特色として、以下の5つの相互交流領域(The five areas of interaction=AOI)⁵⁾がある。

Approaches to learning

Community and service

Human ingenuity (Homo faber)

Environments

Health and social education

AOIは独立した教科ではなく、MYPが設定している8つの教科群と密接に関係している。MYPのカリキュラムを実施する学校は常にAOIを意識しながら学習カリキュラムを考えていく。学習者はAOIを意識しながら学習していくことにより、実社会とつながりのある学習をしていくのである。今回の活動においてもAOIを意識した活動目標を掲げた。数学科も含めたフィールドワーク1全体ではさらに以下の目標が加わる。

- ④科学も、芸術と同様、人々の創造と発明の才から生まれた産物であるという認識を深め、その社会的背景や人間の精神活動に目を向けるきっかけとする。(Human ingenuity)
- ⑤情報や主張を、聞き手に興味を持たせ、かつ、的確に伝えるための工夫について考察する。(community and service)

2 タイムテーブル

東近美でのタイムテーブルは以下の通りである。

表1：東近美でのタイムテーブル（午前）

●午前の部					
time		A	B	C	D
10:00	開館 エントランス集合	鑑賞についての注意事項説明、作品探しマップ配布、ガイドスタッフ紹介			
10:05-10:15	作品さがし	美術館が用意した作品探しマップを利用してトーク場所へ移動する			
10:15-10:30	ガイドスタッフ自己紹介 ギャラリートーク①	和田三造《南風》	富田溪仙《紙漉き》	安井曾太郎《金器》	瑛九《青の中の丸》
10:30-10:45	ギャラリートーク②	川合玉堂《行く春》	アルプ《地中海群像》	石井林響《野趣二題》	松本竣介《Y市の橋》
10:45-11:00	好きな作品さがし	5+5+4の3グループ	5+4+4の3グループ	5+4+4の3グループ	5+4+4の3グループ
11:00-11:25	好きな作品発表	5+5+4の4グループ	5+4+4の4グループ	5+4+4の4グループ	5+4+4の4グループ
11:25	エントランスへ移動	* 時間的余裕がある場合は、ライブラリやショップ、レストランなどを案内			
11:30	エントランス集合 解散	あいさつ。教員側から諸連絡			

午後も同様のスケジュールである。

主な鑑賞活動は以下の通りである。

- ①：東近美が用意したクイズマップを使用した作品探し
- ②：ガイドスタッフによるギャラリートーク
- ③：生徒たち自身による好きな作品探し及び生徒によるトーク「私の一押し作品」

その後時間があれば館内を見学することとしたが、実際はほとんど時間がとれず、ライブラリーやショップを見学したグループはほとんど無かった。

各グループには外国籍や帰国生の海外生活経験者と、国内小学校出身者がほぼ同数になるように配置した。グループ分けに関しては機械的に行った。この4グループを大グループとした。大グループに対してガイドスタッフによるギャラリートークが行われた。さらにこのグループを4～5名の小グループに分けた。大グループでの活動はガイドスタッフが中心になるいわゆる対話型の鑑賞である。これを各グループとも2回行う。小グループでは自分たちが会場内の好きな作品を探し出しその作品について、気に入った点はどこか、どこがすばらしいと思ったか、どの点をみんなに紹介したいか等を発表した。

3 当日までの流れ、ガイドスタッフとの交流

美術館を活用した鑑賞教育では学校内での事前の学習も重要なポイントとなる。ただしその方法は様々で、いろいろな見方ができる。一般的には活動当日に鑑賞する作品について図版等で鑑賞し、生徒に興味を持たせるといった、プレ学校美術館的なことや、作家研究、作品研究など美術史的な学習が考えられる。今回の事前学習は上記のようなことはしなかった。1年生の5月というほとんど入学直後の実施で物理的に時間がとれないといったこともあったが、今回の目的の通り、作品に対して自由に考え、自分の考えを述べることに重きを置いており、調査研究等の事前授業は行わず、むしろ当日予備知識がない形で自由に鑑賞することにした。また、独自の批判的思考、問題解決能力を養うといった意味からも当日の対話形式の鑑賞や自分たちの発表を重視した。

今回は鑑賞活動における美術館のスタッフやボランティアガイドスタッフにも焦点を当てた。これは、目的にある「解説ボランティアと鑑賞活動をおこなうことにより奉仕的精神を学ぶ。(Community and service)」を受けたものである。一般的な美術鑑賞学習においては、いわば裏方的なところにスポットを当てた鑑賞授業を考えたのである。ガイドスタッフに聞いてみても「私達は裏方に徹し、鑑賞の妨げにならないように鑑賞のお手伝いをする」と言うような趣旨の感想を聞いた。確かにそうかもしれないが、あえてその裏方を演じようとするスタッフと事前から関係を持ち、より深い当日の活動ができないかと考えた。

そのために事前の活動として、生徒及びボランティアガイド双方で手紙を書き交換した。普通は一期一会的な校外での出会いの鑑賞活動であるが今回はもう少し深い人間関係を作ろうと考えた。

以下、生徒の手紙とガイドスタッフからのメールの一部である。生徒の手紙は便箋1枚程度に書かせて郵送した。ガイドスタッフからのメールは担当する生徒に印刷して渡した。また廊下の壁面に掲示した。生徒は手紙にニックネームを記入し、当日もニックネームの名札を付けた。これは事前に生徒の印象をガイドスタッフに伝えるためと、少しでもリラックスしてトークができるようにというねらいからである。また、セキュリティ一面も考慮している。

4 交流の実際

(1) 生徒からの手紙(以下全て仮名)

Oさんへ

Mです。マエちゃんと呼ばれています。サッカーが得意で、スポーツや読書が好きです。図工では、工作するのが好きでした。美術館には行ったことがありませんが、区の小学生の作品展には何回か行きました。

私のニックネームは「マーコ」です。好きなことは読書をしたり、みんなでいろいろなゲームをしたりすることです。私は小学校の図工で染め物をやったのがとても楽しかったのを覚えています。のりを厚さが平らになるように塗るのも楽しかったし、色を塗るのもおもしろかったです。よろしくお願いします。

私のニックネームは「フーミン」です。好きなことはドラマを見ることとパソコンです。パソコンは最近得意になってきました。美術館に行ったことはないですが、図工では、ランドセルのデッサンが楽しかったです。どうぞよろしくお願いします。

私のニックネームは「ミッチー」です。好きなことはスポーツで得意ことはバスケです。私は上野の美術館に行ったことがあります。そのときは自分の絵を見に行きました。もちろん他の人の絵も見ました。

Tさんへ

私は「ミキ」です。好きなことは読書です。私は幼いときにいろいろな美術館に行きました。最近行ったのは、不思議な絵がたくさんある美術館で、とてもおもしろかったです。

私は「ミッチャン」です。好きなことは絵を描くこと、始めたばかりだけれどギターを弾くことです。有名人ではYUIが大好きです。思い出に残っている図工の授業は染め物とマブリングです。

(2) ガイドスタッフからのメール (3名分を掲載)

TM

こんにちは。中学校生活にはもうなれましたか？

私は東京国立近代美術館のガイドスタッフ、TMです。

あなたに美術館を好きになってもらうことが、私の役目です。

あなたの好きなこと、得意なこと、興味のあることは何ですか？

わたしは旅行が好き。車の運転も好き。そうそう、サッカーを観戦するのも大好きです。でも、家の中であれこれ想像しながら、ぼんやり過ごすことも好きなのです。

自分のことを好奇心いっぱいの性格だと思います。

あなたの性格はどうですか？

さあ、いろいろなことを美術館の作品をみながら話しましょう！

質問もOKですよ。

では、5月11日に会いましょう！！

☆年齢はヒミツですが中3の娘を持つママでもあるYです。

絵や彫刻、陶磁器を見る事、夕焼け、ヒグラシの声、ラムレーズンアイス、オードリー・ヘップバーン、タッキーの笑顔・・・が大好きです。

☆美術館へようこそ！！

たくさん作品が目の前にありますが何も構える必要はありません。

1つでいいから心にピピッとくるものを探して感じてみてくださいね。

こんにちは。

今日国立近代美術館で皆さんと一緒に絵を見るTTです。

私が皆さんと同じ中学校1年生だったのは今から50年前の遙か昔のことです。

地方に住んでいて、その頃は美術館もありませんでした。

現在多くの美術館に囲まれ、いつでも素晴らしい作品を見ることが出来る環境にある皆さんが大変羨ましく思います。

好きなことはスポーツをすることです。

中学生の3年間は野球部にいました。大学も4年間運動部でした。

そして5年前に会社を定年で辞めてからは美術鑑賞が大好きになりました。

絵や彫刻は奥が深く見れば見るほど色々なことを感じる事ができ楽しくなります。

好きな作品は何時間見ても飽きません。

毎年約1ヶ月間海外の美術館や教会を訪ねて絵や彫刻を見て回るのが今一番の楽しみになっています。

皆さんも今日の日をキッカケにして絵や彫刻を見ることを好きになって下さい。

以上のように手紙やメールでの交流を行った後に美術館での鑑賞活動を行った。掲載した生徒の手紙はごく一部であるが、どの生徒のものも内容は簡単な自己紹介であり特別なものではない。学芸国際中は海外生活を経験した生徒が多数いるが手紙を見ると、国内で生活している生徒より、海外で生活している生徒の方が美術館に行った経験を持っている者が多い。海外生活という貴重な時間を有意義に使おうということがあるのだろうか。一方国内で生活してきた生徒は美術館に行った経験がある、と書いた生徒はほとんどいない。東京という美術作品鑑賞には比較的恵まれた地域でもこの状況である。このようなことも美術館を活用した鑑賞活動を学校で行う意義はある。

一方、ガイドスタッフからのメールには、生徒が身近に思えるような内容が記されていることがわかる。自分の趣味であったり、経験であったりと、中学生が出した自己紹介文と同様に自分たちのプロフィールについて書かれており美術の専門的な難しいことは書かれていない。これは今回の活動が知識獲得に重点を置いた学習を目的としているのではなく、美術作品や美術館そのものに慣れ親しむことを大きな目的しているためである。緊張感を持たずにリラックスして当日の活動に取り組めるようにしてほしいという配慮をスタッフ側も考えてくれたのであろう。

IV 当日の記録

1 記録の方法

記録は美術館側、学校側それぞれでビデオ撮影を行った。撮影はA~Dすべてのグループに対して行われた。なお、記録及び記録の学術的な使用については事前に生徒保護者より了承を得てある。

以下は午前中の1つのグループの活動である。このグループは13人で構成された。ガイドスタッフは男性、女性各1名、合計2名が担当した。はじめにグループ全員に対して2つのギャラリートークを各15分ほどで行った。瑛九「青の中の丸」、松本俊介「Y市の橋」である。それぞれのギャラリートークはガイドスタッフが1名ずつ担当した。その後、4人、4人、5人の3グループに分かれ自分たちの好きな作品について発表した。以下は5月11日の活動の記録である。

2 ギャラリートーク

(1) 〈ギャラリートーク①〉対象作品 瑛九「青の中の丸」(ガイドは男性)

(ビデオの記録は、描かれている色に対する会話の途中から残されている。なお、行頭に(生徒)と書いてあるのは生徒の発言、(ガイド)と書いてあるのはガイドスタッフの発言である。)

(生徒)黄色と青が反対の色だから。青がベースの色になっているから。

(ガイド)ああそうか、そうか。黄色と青が反対の色だと。じゃあね、今度は形をみてみましょう。どんな形でしょうか。はい。まるもたくさんあるんですけどどうですか。

(生徒)本当のまるじゃなくて。

(ガイド)ああ本当のまるじゃなくて。

(生徒) ずれているような。

(ガイド) ずれているような。

(生徒) 楕円というか

(ガイド) 楕円というか。まるでいろいろな形というか、大きさも違う。それ以外に気がついた人、形で気がついた人はいますか。今、まるでたくさん描いてあるということと、同じまるでもたくさん形が書いてあるというのが出ました。

(生徒) 大きさも違う。

(ガイド) ああ、大きさも違う。ええ、この絵を描いた人はですね。ちょっと見えるかな。その右の方、ちょっとそばに寄って見てくれるかな字を。作者のことが書いてある。読める人はいますかね。はい、どうぞ。…。難しいかな。あのね、瑛九っていうんですよ。瑛九ってどこの人かわかるかな。

(生徒) アメリカですか。

(ガイド) 日本の人なんです。どうしてこんな名前つけたのかな。あのね、皆さんニックネームつけてるでしょ。マーコとか、それと同じでこの人はニックネームをつけてるんです。それでこの絵を見てですね、小さなまるがたくさん描いてあるとかいろいろな色が使ってあるとかありましたが、何かに見える人います？ どんなものでもいいですから。はい、どうぞ。

(生徒) お店で、石とか。

(ガイド) お店で、石とか？

(生徒) あの、壁に石とかやっであるように見える。

(ガイド) ああ壁に、石がたくさんやっであるみたいに見える。ああ、はい。それ以外に見えるっていう人。

(生徒) 川に流れている石。

(ガイド) あ、今、川に流れている石とっていました。ああ、それ以外に見える人。はい。

(生徒) 夜空。

(ガイド) 夜空。あのう、夜空って、あのう上の方ね。夜空に見える。それはどうしてかな。

(生徒) キャンプに行ったときにすごい光が、星の光だけで明るかった。

(ガイド) ああ、キャンプに行ったときに夜空を見たときにきらきら星が輝いているように見えたっていう。ああ。それ以外に、私にはこんな風に見えるっていう人。水の中の石とか、壁のいろいろな(石)とか、夜空、星とか。他に。あのう、この作者っていうか描いた人は100年くらい前に生まれて50年くらい前に死んだ。だからもう、48歳で死んだんです。50年前に死んだんですが、「青の中の丸」っていう作品の題名つけているんですよ。でもね、今皆さん何人かに発言してもらった通り、いろいろなものに見えるのが楽しいんで、じゃあ、水の中の石に見えるっていう人手を挙げてくれますか？ 1, 2, ああ、2人ね。じゃあ、壁の石？ ああ、4人ですか。で、星に見えるっていう人。ああ、一番多いですね。ですから皆さん、いろいろなものに見えるっていうから、だから楽しいんです。じゃあ、次の作品に移ります。

(2) 〈ギャラリートーク②〉対象作品 松本俊介「Y市の橋」(ガイドは女性)

(生徒) これから何かが始まる感じ。

(ガイド) ああ、これから何かが始まるって感じ。

じゃあ、夜明け前っていう感じ？ これから何かが始まるぞって。じゃあ、今真っ昼間とかすごく明

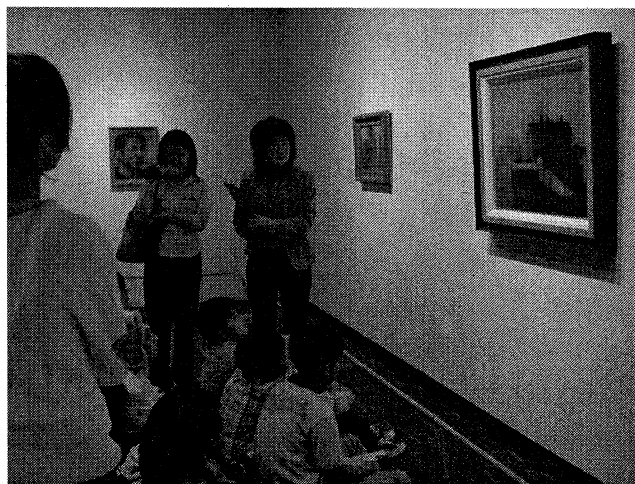


図1：トークの風景

るいとかそういう感じではないのね。こう、暗がりっていう2人ともそういう意見だけど、みんな同じかな。何で暗く見えるんだと思う？じゃあ、今夜明け前っていつてくれた人いたけれども、じゃ、夜明け前に見える？それとも日中に見える？じゃあ、夜明け前に見える人。ああ全員。じゃあ、日中に見える人？あ、誰もいない。じゃあこんなにみんないるから、誰に聞こうかな。どうして夜明け前だと思ったか。はい。

(生徒) 空の方は暗いんだけど何となく明るい。

(ガイド) ああ、空は暗いんだけど何となく明るい。

(生徒) 周りの建物は陰とかで暗いけど空はちょっと明るくなっている。

(ガイド) ああ、みんなこの空何色に見えるかしら、何色だと思う？何色に感じる？ちょっと難しいかな。何色に見えるこの空？(手で生徒を指し示して) 何色が塗ってあると思う？

(生徒) ちょっと青に近い水色っぽいような。

(ガイド) うん、そうだよね。あのね、例えばもし日中だとして、日中に見えるって子もいるのね。で、その子は、別に答えはないんだけど、ちょっと雲っぽい白っぽいものも見えるっていう人もいるんだ。だから、じゃあ、お天気はどうだと思う？って聞くと、白い雲も浮かんでいるから、空の色も水色っぽく見えるから晴れなのかなって思うけどでも、何となくみんな暗いなって思う。それって何でかなって思うんだけど、さっき誰かもいつてくれたように、建物の色が暗いから、色があんまり無いですね。ちょっと明るい暗いってだけで。色っていうのは光が当たっているから見えてくるものなんだよね。だから多分いろんな色が見えてくると、あ、光が当たっているんだなって思うから、多分みんな自然にお天気がいいんだらうって印象を持つんだらうと思う。だから建物が暗いとかいうことと、晴れてないのかなって思ったってことは実は結局同じ所に気がついてくれているんだと思う。じゃあね、この中にまずは何が描かれているのか、よく見てみましょう。目についてみたものから(生徒が手を挙げる) はい。どうぞ。

(生徒) 工場。

(ガイド) 工場。あつ。すごい。何で工場ってわかったの。
煙突があるから。

(ガイド) よく見てますね。そうね。煙突があるもんね。うんそう。これ工場ですね。じゃあ隣の人は、他に何か見えている？

(生徒) 人が。

(ガイド) ああ、どの辺に。

(生徒) 橋の上に…。

(ガイド) うん。何人いる？

(生徒) 1人？

(生徒) 1人？あ、違う3人かな。

(他の生徒) あ、3人

(ガイド) なんかこの絵って暗いからなんかよくわかんないんだよね。よく見てみると今3人っていつてくれた人がいて1人が橋の上で2人目はどこか、指さしてくれるだけでもいい。右の方？その右にちょっと並んで足みたいのが4つ見える。そうですね。あとはなんか他のものは見える？どうでしょう？あ、ミキちゃんさっき手、挙げてくれた。もっと他にないかな。もっと他に大きいものない？

(生徒) 十字架？

(ガイド) 十字架。ああ、すごい気がついたね。右の端っこね。うん、みんな気がついているんだらうと思うけど、でも何って名前をつけていいかわかんないから手を挙げられないんだよね。今、十字架って名前をつけたから発言してくれた。そう、これ十字架にすごくよく似てますよね。でも何だかよくわかんないわよね。こんな所に十字架があるなんて変だしね。そう、でも十字架っぽいものは確かにあります。あと何があるかな。すごい単純なことでもいいんだよ。見えるもの何でも。はい。

(生徒) 階段。

(ガイド) ここに階段があります。はい、どうぞ。

(生徒) 空。

(ガイド) 空、ほんと、空があるよね。みんな見えているよね。空ね。この調子でもっと無いかな。はい。

(生徒) 階段の下が水っぽく見える。

(ガイド) ああ、水に見える？

(生徒) なんか、何だろう濁ってるっぽい。

(ガイド) 濁ってるっぽい。そうですね。これが水に見える人って他にいる？あ、実は何だ、みんな見えてたんじゃん。あと、ワッタンは何が見える？

(生徒) 水の所に橋の、あ、橋って凶なんですけど(聞き取り不明瞭)、よく見たら跳ね返っているんで白っぽいものがある。

(ガイド) そう、あ、よく見てますね。すごく一番暗いかもしれないねってところなんだけど、水が描いてある所って。でも何か映っているようにも見える。後ろの人見えますか。もし見えなかったら前に回り込んで来て見ていいですからね。どうですか、よく見ると水に何かぼうっと明るいものが映っているようにも見えるよね。じゃあ橋の上にいる人は何をしているのかなあ。自分があの人だったら今何しているんだと思う？あの絵の中に入ってみよう自分が、何かぼおっとしているのかな、何か考えているのかな、自分だったら何しているのかな。自分が今まであんな風に立ってたことなんて思い出せるかな。

(生徒) あの周りの景色が悲しいから1人でいたいなあって。

(ガイド) 悲しいから1人でいたい。そう、思い入れたっぷり絵の中に入ってますね。いいですね。他にみんなも同じ気持ちかな。そんな感じかな。じゃあ色とかものとか見てきたけど形はどうだろう。さっきの絵には丸っぽいものがいっぱいあったけど、この絵はどうだろう。

(生徒) 四角。

(ガイド) そうよね。何かカクカクってしたものが多いよね。さっきは丸っぽいものが多かったけどね。うん。あと何かあるかな。

(生徒) さっきのは風景画じゃないけどこれは風景画。

(ガイド) うん、これは風景画。みんな風景画って描いたことありますか。学校の授業とかで。

(生徒) ある。

(ガイド) ある。どんなとこ描きました、今まで、描いたときって？風景画描いたことある人？どんなとこ描いた？(手で生徒を指し示して)

(生徒) 自分が旅行に行った思い出。

(ガイド) 自分が旅行に行った思い出を描いた？じゃあ、その場所だなあって思い出せるものを絵の中に描いた？

(ガイド) あなたも旅行の先で思い出になる絵を描いた？じゃあこれって、ぱっと見てどこの絵って、作者はどこの絵ってわかるだろうけど、例えばこれって旅行に行ったときに描いた絵だと思う？ね、きっと誰も思わないよね。どうしてだと思う？この題名はY市の橋っていうんですけども、Y市っていうのは実は横浜のYなんです。でも例えばみんなが横浜に行って風景画描くとしたらこういうの描くと思う？多分マリントワーとか大きい観覧車とか横浜だってわかるものをきっと描いちゃうかもしれないよね。でもこの人は一応横浜なんだけど横浜ってわざわざわかんないように描いてるし、で、どこに行っても普通の人だったら見落としちゃう所を描いているんだね。で、描いた人は松本俊介という人なんですけれども、ええとこの人についてちょっとお話をします。この人が生まれたのは1912年、大正時代。亡くなったのが1948年、だから引き算をすると36。結構若かった。そうなんです。それであのう、渋谷で生まれたんだけどもお父さんの仕事の都合ですぐに岩手県の方に引っ越しをして、小学校はいわゆる師範校の附属小学校って言って東京で言うと学芸大学附属小学校っていうようなところで、とっても成績が良くて卒業すると

きは答辞を読んだり何かして算数とか図工とか得意で将来はエンジニアになりたいと思って、中学校を受験して岩手県のトップの中学校を受験して受かったんだけど入学式のときに病気になってしまって、すごい頭痛がして1週間も2週間も寝込んで、治ったときには耳が聞こえなくなっていたの。家族の人が心配して先に大学に入ったお兄さんが、何か耳が聞こえなくても楽しめるものはないかな、って思って東京に出てきたお兄さんが絵の具を買って俊介にあげて、それで俊介は大学には行かなくて東京に出てきて画家になりました、っていう人です。で、何となくこの絵を見て賑やかな絵かなとか静かな絵かなとか、聞かなかつたけどそれぞれ感じてくれたと思うけど、俊介はみんなが気づいてくれたように線を描くのがすごく好きでカクカクってしたのが多いんだと思います。街の何でもない風景を描くのが好きだったようです。で、もしかしたらもともと図工とか算数とか好きだったのに関係があるのかもしれないけどね。俊介が街や建物が好きで描いていたことで言葉があるのでちょっと読みます。「僕は並んでいる建物は僕にとってあまり立派な建物である必要はない。安っぽい建物でも幾本かの立派な線を必ず持っている物である。そして貧しくはあっても1つでも窓が深い陰を持って開いていたら僕はきっと満足するだろう。」だからなんでもない建物でも何かこの線は俊介から見ればかっこいいなあとか味があるなあと思ったら、行った先で小さいクロッキー帳でささっと線だけでスケッチをして、家に帰ってこういう風に油絵に仕上げたんですね。だから俊介がいいなあこの線って思ったのは、他の人は気がつかないけど俊介だけがこう発見した美しさといった物を感じて絵にしたんでしょうね。俊介が亡くなった1948年ていうと太平洋戦争、第2次世界大戦が終わった3年後なんです。で、戦争中は俊介ぐらいの年の人はどんどん戦争にとられていって一緒に絵を描いていた仲間もとられていって、だんだん、だんだん自分1人が残って耳が聞こえなかったから戦争にも行かなくてすんだんだけど、淋しくなってくる。そういう時代の中でこの絵を描きました。で、「Y市の橋」って言うのは横浜の、実はこれ何に見える？上の、ちょっとわからないかもしれないけどここに横浜駅があってここに線路があって電車が走っている風景なんですね。線路をまたいでいる橋だったんだけど、最後に空襲で焼けてしまうんですが、焼けたあとの絵を俊介はもう一度描いています。こういう絵です(持参した図版を示す)。だから今行ったらもう何もわかんなくなっちゃっているかもしれないけれども、俊介の絵の中にはいつまでも残っている風景ということですね。最後にこの絵を見て何かこう思ったとか感じたとか、今こう思ったなあとかあったら、何かありますか。はい。ではこの絵の話はここでおしまいにしましょう。

3 好きな作品発表「私の一押し作品紹介」

(1) 次に小グループで分かれて行動する。

〈好きな作品発表①〉対象作品 平山郁夫「建立金剛心図」5人グループ

(ガイド) ではお話ししてください。

(生徒) あれは、真ん中の黄色っぽいのは自分の心の中の自分。これ全部が自分で、真ん中が心の中の自分ていうか、で、葉っぱは自分の心を隠しているけどちょっと見えちゃっているって感じ。

(ガイド) で、どこが一番良かった？周りの一番向こうが平和で、鳥みたいの。あれが戦いとかいってなかったっけ。下のところ。下にあるのが争いで。

(ガイド) 下にある明るくなっている所が争いね。何か描いてありました？

(生徒) ライオン。しっぽが描いてある。

(ガイド) みんなよく見えるかな。左下のちょっと明るくなっている所、ライオンぽいようなしっぽが描いてあってあれが戦いを表している。で、これが願いを叶える。

(ガイド) あの右の上の所？はい、で、そこが願いを叶えるそういう所？

(生徒) 恋愛感情とかいってなかったっけ。

(ガイド) どれどれ、おもしろいね。

(生徒) これ(指さして)女の人みたいの。

(ガイド) 女の人みたいだね。

(ガイド) 女の人みたいだから恋愛感情じゃないかなって思った？右上は何に見えましたか？

(生徒) 願いを叶えて…

(生徒) 何かの知識。

(ガイド) 知識。

(生徒) 何かの知識をつける鳥みたいな…

(ガイド) 良かった、おもしろかったと思った所は、この絵で。

(生徒) 真ん中。

(ガイド) 真ん中。ああ。何か質問とかありますか。はい。

(生徒) これがどうして心の中に見えたんですか。

(生徒) (キャプションを指して) ここに心図ってあるから。

(ガイド) ああ、みんな見えないかもしれないけど一番最後に心図ってあるんですね。はい。

(生徒) じゃ何で心の中に木があるんですか。

(生徒) どうして心の中で木が燃えているんですか。

(ガイド) どのへん？

(生徒) ちょっと立って教えてくれる？

(生徒) この辺、この辺が燃えているように見える。

(ガイド) 金色に見える所？

(生徒) 金色っていうか、黄色？木漏れ日みたいに見えるんだけど後ろの方が明るい色に見えるから燃えているように見えた。

(ガイド) そうですね。

(生徒) 金色のところが自分の本音。それを隠そうとしている葉っぱから漏れている。

(ガイド) ああ、さっき木漏れ日みたいって言ってくれたけど、木漏れ日みたいな所から本当の気持ちが漏れている、漏れて見える、みたいに感じた、だって。すごいね。いろんな感じ方があってすごいね。他に自分はこう思ったとか、ここはどうしてとかあったらこの5人に聞いてください。どうですか。何かない？何でもいい？

(生徒) 最初にタイトルの方を見たんですか。それとも絵の方を見たんですか。もし、最初にタイトルを見ていなかったらこの絵を最初見たときに何を思いましたか。

(生徒) (5人全員が) 横1列に見たのでタイトルと絵と多分同時くらいに見たと思います。

(ガイド) 絵を最初見た人はどう思いましたか。

(生徒) 絵を見てそして、題名見たら心図って書いてあったから、ああ、みたいな。

(ガイド) なるほどと思った？

(生徒) 心図っていうタイトルを見ないと心の中って見えづらいじゃないですか。やっぱり、見えづらいからタイトルがついているんじゃないですか。

(生徒) そうじゃなくて、最初に見たときにどう思ったのかなって。それこそ、題名見てからこの絵を見るのと、絵を見てから題名見ると気持ちとかも変わると思うし。

(生徒) 最初金色で描かれている所が、あ、珍しいかっこいいと思って。

(生徒) あ、あの4つの描かれているのが、はっきりとは描いていないんだけど少し見えて、それが珍しいなと思ったからこの絵に注目したら題名に心図って書いてあったから、そういう解釈をしました。

(ガイド) 最初に絵を見て、そして心ってタイトルを見て納得したんだね。

(生徒) (うなずく)

(ガイド) あとは何かありますか。…。では終わります。次のグループは。

(2) 〈好きな作品発表②〉対象作品 北脇昇「Quo Vadis」4人グループ

(ガイド) では何でこの絵を選んだのか。

(生徒) これだって思ったのは、これは多分少年兵だと思って、本を持っていることから、多分読書とか勉強が好きだったんだけど戦争が激しくなっただけでこういうちっちゃな子どもも戦争に行かなきゃいけないんだということがわかりました。でその次にいっていたのが道しるべ。(画面を指さしながら) 道を示すもので、ここにある嵐の所と、兵隊の戦列?のところをみて、戦争に行かなければ自分の街とかで爆弾とか落とされて殺されて死んでしまっただけで、戦争に兵隊として行っても敵と戦って死んでしまう、ということで、どっちに行ってもこの少年は死しか訪れない、じゃないかなと思いました、…で思ったのはここにとげのある深紅のバラがあるんですけど、私はこれは多分少年へのはなむけだと思ったんですけど色が赤いのととげのあるので、多分戦争を皮肉っていると思いました。

(生徒) 左にある、アンモナイト?の殻というか何で、わざわざ戦争の所にアンモナイトがあるのかなと思ったんですけど、よくよく考えてみてこれは私の意見なんですけどアンモナイトが空っぽじゃないですか。だからその空っぽが寂しさを表している…で周りに人がいなくて、助けてえっていう人もなくてただむなしくアンモナイトが転がっているってような感じがしました。

(生徒) 似たような考えなんですけど、アンモナイトが少年の立場とか気持ちを表していると思いました。

(ガイド) どうですか、何かいいたいことはありますか。アンモナイトに注目が集まったみたいですがけれども。

(ガイド) いろんなことを見て話してくれたよね。質問とかあったらしてみましよう。

(生徒) 何で少年1人だけが向こうに並んでいる軍隊の所に並んでいないんですか。

(生徒) 私が思うには多分他の友達とかはそっちに行くしか方法がないからとかで先に行っちゃって、でもこの少年はさっきミキちゃんがいったように勉強が好きで続けていたいんだけど、「じゃあ僕はどうしたらいいんだ」みたいな気持ちを抱えているから1人でのいるんだと思います。

(ガイド) 他に私はこう思ったみたいなのはありますか。

(生徒) ミキに質問なんですけど、皮肉っているって何ですか。

(生徒) 馬鹿にしているような感じだと思います。

(ガイド) 何を馬鹿にしているような感じ?

(生徒) 何で少年が、戦争に行かなければいけない。少年は戦争があるから、兵隊にならなければいけない、だからこういう戦争は馬鹿みたいなんじゃないかっていう感じです。

思ったことなんですけど、さっき迷っているっていったんですけど矢印の方向を見てみると左側は軍隊の方を向いていて右側は街の方を向いているから、それとも勉強というか、本、勉強をするのかというような分かれ道みたいなものの印なんじゃないかだと思います。

(生徒) 私もそう思います。

(ガイド) どっち行くか迷っている?

(生徒) でも少年は左の方を向いているじゃないですか。だから多分、こっちに戻ることに、家族の所へ戻ることを多分考えてないと思う。

(生徒) じゃあ左の方へ行くと家族の所へ戻ることはならなくて…。で、右の方へ行くと暗いから、空襲とかでバンバンって鳴っていて、で、左はみんなが軍隊として…。

じゃあどっちかっていうと左の方へ行こうとしている?

こっちしか道はないのかな、やっぱり…みたいな。

(ガイド) はい。

(生徒) 軍隊が自分、少年兵?に向かってきている。

(ガイド) ああ、こっちに向かってきている?

(生徒) 足がこっちに向かって来てきている。

(ガイド) ああ、おもしろい意見が出ましたね。向こうに行っているという人とこっちに向かって来ているように見える人といいますね。両方に見えるんですね。

(ガイド) じゃあ、この人は右の方に向かっていていると思う手を挙げてくれるかな。(あまりいない) じゃあ左の方は(数名が手を挙げる)。

(ガイド) ああ、これからこの人はどっちの方へ行くんだろうっていう、どうですか。正解というのはないのでどうぞ。みんな右でいいですか。(特に手は挙がらない)

(ガイド) では、この絵で一番気に入っている所はどこですか。

(生徒) 特に気に入っているっていう所よりも全体を見てぱっと見た瞬間に戦争の悲しさ、むなしさ、戦争のときの決断というようなものがぱっと一目見ただけでわかる所がすごいと思いました。

(3) (好きな作品発表③) 対象作品 山口華楊「飛火野」4人グループ

(ガイド) 次の作品です。

(生徒) 私たちは「飛火野」っていう作品ですけど、2頭の鹿はこっちに走ってきていると思うんですけど、鹿は左の方はちょっと明るくって、明るい緑ぼい色しているので、こっちに光があるんじゃないかって考えたんですけど、この鹿は2頭の鹿は暗い所から抜け出して光に向かって走っているんじゃないかと考えました。

僕は全体的に見て正直最初はわあ鹿かわいって感じだったんですけど、係の人に聞いてみたら、芝生は何かふわふわしている感じだったので何を使っているのか聞いてみると石を砕いてそれを粉にして使っているって聞いたので日本的な描き方なのでこれを選びました。

(ガイド) 今言ってくれたのは岩絵の具のことだと思うんですけど、石とか鉱物を砕いて使う絵の具です。

(生徒) 私も最初は鹿、かわいって感じであまり考えなかったんですけど、2頭の鹿が動いている感じで、写真に撮ったって感じよりも、ビデオカメラで撮ったって感じがするから、すごいなあって思いました。

(ガイド) 動いているようですね。

(ガイド) おもしろい意見ですね。

(生徒) 私はこの色遣いが好きで、左側の方はすごい結構痕みたいな黒ずんでいてこういうのは寂しいとか怖いとかそういう、いやなことから明るい側に逃げているっていうか幸せの方に2頭が走っているから、そういう物語じゃないけどそういう話のつじつまが合うからこの絵を選びました。

(ガイド) おもしろい見方がいろいろ出てきました。何か気がついたことは、はいどうぞ。

(生徒) 右の方は明るいっていいじゃないですか。でも右の下のところもちょっとくらいですよね。それはどうですか。

(生徒) まあ、暗い所もあるさ。明るい所にも暗い所があって。幸せしかないのってつまんないじゃないですか。

(生徒) 色遣いとか鹿がかわいいとかあったんですけど、何で子鹿2匹が走っているって考えなかったんですか。

(生徒) だから2匹が走っているっていうのは暗い方から明るい方へ走っているって考えたから。

(生徒) それはわかるんですけど、何で絵の中に親とかいないで子鹿2頭で走っているのかなあって。

(ガイド) じゃあ、イクちゃんはそこが不思議だなあって感じたんですね。

(ガイド) 他に何かこの絵を見てここが好きだなとかありますか。

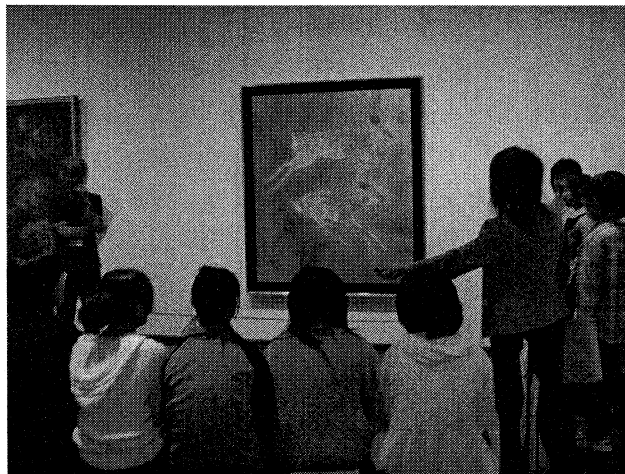


図2：一押し作品紹介

(生徒) しっぽのふさふさ感が好き。

(生徒) ちょっとそこだけ感じが違うような。触りたいけど触れない。

(生徒) 鹿のしっぽって。家のそばに鹿がしょっちゅういたんですよ。アメリカに住んでたんですけど。でも鹿のしっぽってどんな感じしているんですか。言われてみるとそんなにふわふわしてたかな。白かったかな。まじまじと見なかったんですけど。

(生徒) ちょっと下の方から見ているのかな。

(ガイド) 皆さんいろいろ見えていますね。では時間ですので終わりにしましょう。

4 トークから見えてきたもの

(1) 大グループでのギャラリートーク

以上のように2本のガイドスタッフによるトークと3本の生徒たちによるトークが行われた。

瑛九の作品に対してのトークは1本目だったことと対象が抽象画だったこととでやや堅い面が見られた。それでもスタッフの質問によって興味深い発言が出てきた。青と黄色という色に着目したり、丸といっても楕円であると細部まで見て丸のゆがみを発見したりしている。さらに、描かれている無数の丸を川の中の石であるとか、壁の石の模様であるとか、星空であるとか様々なものに生徒は見立てている。これは生徒自身の経験から連想しているものであろう。キャンプに行ったときの夜空の無数の星の美しさを生徒はこの絵を見て思い出したのである。生徒はおそらく会話の中で自分の経験を思い出してきたのであろう。はじめから思い出していたとしても、スタッフの「どんな物に見えても良い。自由に発想して良い」という言葉がけで自信を持って自分の考えを発言したのであろう。そして、スタッフによる肯定的な相づちによって安心して自分の意見を堂々と口にできたのである。トークの全体を通して特徴的なのがスタッフの肯定的な繰り返しである。生徒の発言に対して否定せず、同じ言葉を繰り返す。参加者の意見を繰り返すことにより、発言者は安心し、参加者全員は傍観者とならずに当事者となるのである。

松本俊介の作品に対してのトークでは2本目であったことと作品が風景画であったことにより生徒は違和感なくトークに入れたようであった。ただし、松本俊介独特の暗いどんよりとした色調に対して、何となく暗い絵だな、という印象を持ったようであり会話も活発という様子はなかった。それでも「煙突」や「十字架」のような構造物を発見したり水に映る白い橋(生徒は跳ね返っていると言っているが)を見つけるなど一つ一つ絵の中に描かれたものを発見している。黒い影で表される登場人物も松本俊介の絵にはよく描かれるが、この人物についてははじめは1人だと思っていたのが会話を通して3人描かれていることを知るのである。松本俊介に関してはガイドスタッフがかなり詳しく説明している。特に今回参加している多くの生徒が教育系大学附属小学校出身であり、松本俊介が旧師範附属小学校出身という所なども作者を身近に感じさせるためのエピソードかもしれない。さらに、中学校(旧制中学校)入学後すぐに耳が聞こえなくなるという強烈な話題では、かなりのインパクトを与えたようである。おそらく生徒は旧制中学ということは知らないであろうから、ガイドスタッフの話だけでは自分と同じような状況の話と思っただけである。さらにY市が横浜という近い土地であることを知る。そして描かれたのが太平洋戦争という時代で、作者が36歳という若さで死ぬという事実を知られるのである。今回の活動の中では比較的多くの美術史的な知識について触れたトークであった。活動後に行ったアンケートでは、このような説明も良かったとしたものが複数あった。

(2) 小グループでのギャラリートーク

次の活動はさらに少人数に分かれての活動である。4, 5人で自分たちの好きな作品「自分たちの一押し作品」を選びそれについて、よさ、魅力といったことを発表し説明する。見ている者も疑問点などを質問するというものであった。活動後のスタッフの反省会では、この「自分たちの好きな作品発表=私の一押し作品発表」活動では生徒は非常に生き生きしており、意見も常識にとらわれず自分たちの言葉で感じたことをのびのびと語っていて、おもしろかった、もっとこの活動に時間を割くべきだった、というよう

な意見がスタッフから複数出ていた。実際に作品に対して発表者側もフロア側も美術史的事実は知らないながらも、感じたこと、思ったことを発言していた。美術史的にみると間違っただけの解釈は多々あったがそれを批判するのは今回の目的ではなかった。作品に対して自分たちの目で何の先入観もなく見ていくこと、対話をしながらより深い鑑賞を持って行くこと、さらに言えばそのような発言をしていくことで鑑賞の楽しさを知ることが今回の活動の大きな目的だったのである。MYPを意識して言えば独自の批判的思考であったり、問題解決能力であったりするるのである。

今回は活動をグループごとに東近美を4つのスペースに分けている。作品を選びやすくする、生徒の流れが分散し混乱を防ぐことができるなどの利点があるが、生徒は一部の作品しかみることができないなどの欠点もあった。このグループでは戦時と戦後の美術及び50～60年代の美術について鑑賞することになった。そのために上記の作品を生徒が選ぶことになり、戦後の日本画作品が2点選ばれるという結果になったと思われる。

平山郁夫の作品の宗教的な面に関しては、生徒の発言からみる限りとほとんど意識していないように思われる。しかし、キャプションを参考にしたとしても心の内面について表現した作品であると感じたようである。争いであるとか、恋愛感情であるとか彼らにとってよくあるような心情について言及しているのは興味深い。金泥を使用した独特の表現が「燃えているように見える」「あ、珍しいかっこいい」と言っているのはまさに生徒の生の声なのであろう。

北脇昇の作品では戦後が題材であるが、生徒は人物の服装からか戦時中の絵と解釈している。この絵が戦争をテーマにしていると最後まで疑わなかった。集団で行進している民衆についても軍隊と解釈し全員がそう受け取っていた。ガイドスタッフもあえて否定はせずそのままトークは進んだのである。戦争と生徒が判断したことについてはその前に見た松本俊介の影響があるのかもしれない。ここで興味深かったのが画中のモチーフを一つ一つ解析していったことである。手前の登場人物を「少年兵」と見立て、その次に道標を発見し説明する。さらに道標脇に生えているバラについて解釈し、左右の遠景について「少年兵」の行くべき選択肢と捉えているのである。手前の巻き貝を「アンモナイト」と捉え、「空っぽが寂しさを表している」としている。ここで彼女らは彼女らなりの絵画解釈を完成させているのである。しかもその時々フロアからのいくつかの意見に対して考えながら作品と対峙しているのである。

山口華陽の作品はこの3点ではもっとも自然を意識した題材と思われる。当然そこには深い作者の意味が込められているが生徒は背景の色、質感に着目した所から発表を始めている。発表の中で岩絵の具の独特の柔らかさ、深さといったものを感じたことについて触れている。フロアからは「なぜ、親がいないのか、親がいないで子鹿だけなのはなぜなのか」という質問が出る。絵だけ見れば子鹿だけでも何ら不思議ではない。しかし、親がいないという世界は生徒にとっておかしな世界と感ずるのは自然である。むしろ親を描かない世界がおかしな世界と発言する生徒の意見を聞くとこの生徒の家族感が感じられる。親子の愛情といったものがこの発言から感じられたのである。生徒の発言は純粹に山口華陽の絵に対してであったがその内容は彼女の家族に対する意識、家庭に対する愛情といった所まで表現していたと感じた。このようなことを考えること、ともに感じていくこと、そして言葉によって表現していくこと、会話によって深めていくこと、気づいていくことがまさに美術の鑑賞活動なのであろう。

V 事後の活動

1 生徒へのアンケート

事後の活動として生徒は「まとめプリント」に感想及びアンケートを記入した。感想は次の4項目である。

- 1-1. 最初に配られたクイズマップは楽しかったか。
- 2-1. 大グループでのトークはどうだったか。
- 2-2. トークの後、見方や感じ方が変わった所。

3-1. 自分たちの「一押し作品」を見たときの印象

3-2. 発表し終わっての印象が変わった所

4-1. 東近美での活動全体の感想

である。以下、2~4の項目について本論に関連するグループの生徒数名のものを記す。

女子

2-1

「Y市の橋」という作品では、横浜の橋をかいているのにY市としたり、戦前戦後の両方の絵を見せていただき、戦前の絵は空が灰色だけれど、戦後の空は赤くてうまく絵に戦争を表していてすごいなと思いました。

2-2

今まで絵を見ていて、おもしろい、楽しいと感じたことはあまりなかったけれど、今日の活動で絵を見て想像するというをやって絵を見るのが楽しくなりました。(青の中の丸という作品)

3-1

建立金剛心図。絵の線が彫ってあるようで、すごいなと感じました。金が使われていて大仏みたいなものや人魚のようなものが描いてあって圧倒されました。色遣いがとてもきれいでした。

3-2

心図と書いてあるので自分の心を表していると感じました。大仏は自分の心で、大仏を囲んでいる4つのものは平和や願いだと思いました。「この作品を描いている人の心はこのような感じなんだな」と感じました。

4-1

戦争の前や戦争中、戦争の後の人々の様子がよくわかりました。戦争の前の絵は少年が決断したときの様子なのかなと考えました。絵を見て想像するのは楽しかったです。

女子

2-1

ガイドさんに説明してもらった作品にはいろんな意味が込められていておもしろかった。また、友達の感じ方もそれぞれで、とても楽しかった。

2-2

絵をいくつかみて、じっくり見ることによって、絵の意味などがわかってきた。また、意味は1つではなくたくさんの解釈の仕方があるとわかった。

3-1

建立金剛心図

不思議な絵だと思った。よく見るとうっすらといろんな生き物が見えてきた。ただ描いているだけではなく、彫っていることに気づいて「すごい」と思った。

3-2

最初見たとき、意味がよくわからなかったけど話し合うとその絵の意味がわかってきた。題名を見て意味がわかったから題名も大切なんだと気づいた。

4-1

難しい作品ばかりかと思ったら私にも理解できる作品ばかりでおもしろかった。題名の大切さやいろんな作品の意味がわかったので良かった。

女子

2-1

グループで活動するのは楽しいし、お互いの意見を聞いたりするのが楽しかったです。

2-2

タイトル(青の中の丸)。青と丸がたくさんある絵でした。丸の色もたくさんありました。具体的な絵で

なくても、いろんな表現が伝わってきました。

3-1

飛火野。やはり、2頭の「鹿」でした。左の方は暗く、「鹿」が走って向かっている右の方は少し明るかったです。暗い闇から明るい光の方へと走っていく感じがしました。

3-2

他のグループが発表した絵もたくさん色使いがあったり、作者の思いが伝わってきました。

4-1

今日は学校で来たけれど見られなかった絵がたくさんあるので今度また来たいと思いました。ただ絵を描くのではなく、気持ちが伝わるようにこれから描いていきたいと思いました。

女子

2-1

わかりやすく説明してくれたし、絵について私たちの意見も聞いてくれながらその絵について説明してくれたからです。

2-2

(Y市の橋) 絵を初めて見たとき、空が真っ暗だったので、日の出前の絵かと思っていました。しかし、説明を聞いた後、曇っている天気という考え方もあるのだと思いました。

3-1

戦争へ行く少年兵の絵で、その少年兵はものすごく淋しそうにしている戦争へ行くときの悲しみを表している絵だと思いました。

3-2

少年兵は、本をもっているところから、もっと町にいて、勉強をしたり家族と一緒にいたいと思っているけど戦争に行かなくてはいけない。そんなつらい分かれ道を表した絵だと見方が変わりました。

4-1

大グループでガイドスタッフの方の説明を聞いたり、小グループで一押しの作品を選んだことで作品により触れることができました。ものすごく楽しかったです。

上記は一例であるが全体的に今回の鑑賞活動については好意的な感想が大多数であった。美術鑑賞という堅苦しいもの、という印象は多くの子どもも大人も持っている。しかし今回の活動では堅苦しいと感じた生徒はほとんどいなかった。不満な点としては、作品を一部しか見られなかったのもっと見たい、時間が少ないといったような、むしろ鑑賞に対して積極的ものが多数であった。ただ問題点として感じるのは、自由な鑑賞による作品に対する「誤った解釈」である。北脇昇の作品は戦後の作品でありこの絵に描かれている人物を「少年兵」と捉えるのはいくら絵の解釈は自由と言ってもこれは明らかに事実を反する。制作年代を見れば、「戦後」をモチーフにした作品だと思う生徒が出てよいとは思いますが、今回の生徒は、戦争について描いた絵だと信じて疑わなかった。やはり、この程度の「間違い」はその場で、もしくは学校へ帰ってから伝えるべきであろう。今回は結局伝えていないが、やはり明らかな誤りについては指導者が責任を持って修正すべきなのであろう。修正を加えるにしてもそのタイミングは難しいと考える。

2 ガイドスタッフに対してのアンケート

活動後にガイドスタッフに対してもアンケートを行った。今回の活動についての率直な意見が述べられている。参加された6名の方から回答を得たが本論ではスペースの関係上、本論で扱っている2名の方のものを掲載する。○囲み番号はアンケート項目、回答項目の文頭□、○で回答者を区別している。

東京学芸大学附属国際中等教育学校 美術科アンケート

①. 図工・美術の鑑賞授業で児童、生徒が美術館を使用することについてどう思われますか。(一般的な場合)

本物の作品にふれるという意味でも、社会勉強(美術館という場所があることを知る、ルールやマナーを学ぶ)という意味でも、大変有意義だと思います。

いつもと同じ学友同士でも、場所が変わると新鮮で記憶に残る授業になると思います。

子供が早い時期に美術館で本物の作品に触れて“美術館は気軽に行けて楽しい場所である”との体験をすることはその後アートに関心を持つことに繋がり、かつ美術館に行く良い習慣が出来る一つの契機となると思う。

もっと積極的に美術館を活用する鑑賞授業を行うべきと思う。

②. 今回の鑑賞授業では事前学習として美術作品についての予備学習をあえてしませんでした。その代わりにガイドスタッフとの交流を1つの大切なポイントと捉え、手紙の交換等を行いました。このような活動についてどう思われますか。

まず、こちらがトークをする時に、お手紙を頂いたことにより生徒さんの興味や知識などの情報が予めあったので、話し方の見当も付けやすくなりました。

また、生徒さんとしても、当日のみのイベントとするのに比べ、手紙を書くことにより美術館に親しみやイメージ、期待などを幾分でも抱き、準備段階からこの行事により主体的に参加できるのではと思います。ただ、本来は生徒さんのお手紙にガイドスタッフがお返事を書くということだったそうですが、今回のような同時発信の方が正直こちらの負担は少ないと思います。

予備学習についても、特に狙いがある場合を除き、先入観を持たずに作品を新鮮に受け止めるためにも、必要ないと思います。

子供にとっては初めて見る作品に対し感じたこと、印象をガイドとの交流の中で自由に表現・発言する能力を身に付ける観点・授業目的から予備学習は必要ないと思われる。

事前教育は作品に対する固定観念を植え付けることになり知識としての美術鑑賞になりがちである。

今回の鑑賞方法はガイドとの対話を通して鑑賞するやり方であり、その為にはいかにガイドと良いコミュニケーションを取りガイドと生徒とは同じ目線(上・下関係や教える・教えられる関係ではなく)であることを感じさせることがキーポイントである。

事前の手紙交換はお互いに初めて会った気にさせずにリラックスして自由な発言する雰囲気が出来て非常に良い方法であると思う。

③. 今回の活動ではどの絵を担当されましたか。(ガイドスタッフの方のみ)

松本竣介「Y市の橋」

瑛九《青の中の丸》

あなたが担当された生徒について、あなたはどんな感想を持ちましたか。

(発表の様子や質問の仕方、質問の受け答え、態度等何でもかまいません。)

一般に、中学生はトークでは大人しくなかなか自分の意見を発表しない傾向があるのですが、こちらの生徒さんはあまり臆することもなく、好奇心もあり発言することにも慣れていく感じで進行しやすかったです。また、好きな作品探しをする時も、学友同士で楽しんでいく様子が伝わってきました。

発表でもチームワークの良さを感じました。

学校の教育方針と実践、帰国子女が多いことから自分の考えや意見を相手に分かる様に積極的に発言していた。一般的に日本人は自分の考え、それも他人とは違う考えを的確に表現し理解してもらうことが苦手で躊躇する傾向が強い。

他の中学生のガイドもやったことがあるが、今回とは大きく違っていて発言する人は限られ、積極的な意見に同調的で独自の意見は少なかった。

○数人グループでの「好きな絵探し」ではお互い意見が分かれて作品を決めかねていて纏まらないようなので当方より「多数決で決めましょう」と言ったらすぐに一作品に決まった。

○当初、他作品をやりたいと主張していた子供が一度決定したらみんなと協調し取りまどめに協力していたのには感心した。

○当方担当の作品は抽象画であったため見る人にとって全く違う印象になる。各人それぞれに違う意見・感想を持ち、自分の感じた事を上手に表現していた。

④. 今回の活動では当日もニックネームで呼べるように名札を付けたり、鑑賞する絵に導くためのパンフレットを作成していただいたりと、いろいろなご配慮をしていただきました。このような工夫についてどう思われますか。

□対話の際に、名前で話しかけることは良いことだと思います。

ニックネームで呼ぶことについては、うち解けるためには良いかもしれませんが、ガイドによっては雰囲気作りに有効かとは思いますが、私自身のガイドでは中学生に対しては、小学生と比べるとある程度、大人として相手をしていますので、あえて必要とはしませんでした。

○名札のニックネームは良いアイデア。

ニックネームで呼ぶとお互いの初対面の緊張感の壁を簡単に排除でき、ガイドとの仲間意識が生まれ話し易い雰囲気作りが可能でベストの方法と思われる。

□パンフレット等のツールについては、美術館や課題に親しみやすくするきっかけ、という以外に、「今回のために作ったもの=welcomeの気持ち」を持ち帰って頂いて、思い出にしてくれたらいいな、と思います。

⑤. 本校では6年制教育という特色を生かし、在学中に複数回にわたり美術鑑賞をするようなプログラムを計画しています。そのことについてご意見をお聞かせください。

□同じようなイベントも6年の間に、本人の成長によって、また回を重ねることによって違う体験になっていきますし、本当に良いことだと思います。羨ましいです。

○複数回に涉りこの様な美術鑑賞を是非実施して欲しい。

「日常の学校教育でどのように生徒が変化、成長していくのか？」

それを美術鑑賞の場で観るのも楽しみである。国際人として通用する論理的表現力や応用力を身に付けるのには美術館での対話型の美術鑑賞が一つの良い方法、教育の場でもあると思われる。

⑥. 今回の授業全体について、感じたこと、改善すべき点等何でもかまいませんのでご記入ください。

○自分の考えや意見を言葉にして表現し相手に理解してもらい、他人の違う考えや意見も良く聞き理解する国際人としての子供を育てる東京学芸大学附属国際中等教育学校の教育方針を大いに評価します。その学習の一環として今回の美術鑑賞授業を実施したことも評価します。

ガイドスタッフに対してのアンケートでは今回の活動の特色について率直な意見を聞くことができた。特に事前の手紙(メール)交換に関してはお互いを知ることができ評価するという意見があったが、一方では、負担となるし、ガイドは当日の鑑賞の手助けをするもので表に出ないように徹しているとの意見もあり、なるほどと考えさせられた。また、生徒同士が発表をしあう「一押し作品」紹介に関してはおおむね好意的であった。今回は中学校入学後すぐで、まだ小学生とほとんど変わらない所もありそのためかもしれないが、発言ものびのびとできていたとの感想が多かった。このような時期に鑑賞活動を設定するこ

とによって身構えないで自由に発言しながら鑑賞活動を体験させることは有効ではないかということが生徒の反省やガイドスタッフからのアンケートから改めて感じられた。

VI おわりに、まとめ

今回の指導要領改訂において、鑑賞指導の重視が挙げられている。現場では鑑賞活動は時間数等の関係で、なかなか実施できないとよく言われる。しかし本来は表現と鑑賞は一体となって創造活動を行っていくものである。やはり、現場の実情に合わせて、表現だけ、鑑賞だけという考えにとらわれない広い視野で、美術を考えていくことが重要であろう。

本論で取り上げた活動は鑑賞活動に特化したものと表面上は捉えられるであろう。しかしこの活動はこれで完結するわけではない。この美術館での活動は次の美術の授業に関連するし、さらに言えば他教科や他の諸活動にも関連してくる。実際に今回の活動は数学科と連携しての教科横断的な活動⁶⁾であった。鑑賞とは美術作品について鑑賞するもの、と狭い世界で完結させるのではなく、表現活動、他教科、他のいろいろな活動、学校行事、さらには生徒の住んでいる世界へと広げていくことが大切であろう。

MYPでは活動を常に生徒の生活している社会と関連させて捉えさせている。自分たちの住む世界から見てこの問題はどうか、問題の解決策はどうすべきか、どんな価値がこの学習活動にはあるのか、等を考えていく。鑑賞活動についても同じである。美術科という教科だけで考えずに様々な視点から考えていくことが大切であろう。

今回の彼らの発表を聞いていると、生徒は作品について語るのに自分たちの言葉を使って考えていたことがわかる。美術史的な知識は当然乏しいのであるが自分たちの今までの経験から、仲間の発言から、スタッフのアドバイスから多くのものを感じ取り表現していた。まさに鑑賞を通じての創造活動であった。

美術館という社会教育施設の利用は学校の中だけで行う教育活動をより豊かにする可能性がある。今後ますます活用する方法を考えていく必要がある。MYPではAOI(5つの相互交流領域)という考え方があるが、この考え方は学校と社会教育施設との連携を進める上で1つのヒントになり得ると考える。すなわち教科を超えた単位で授業を進めていくことにより、人的にもカリキュラム的にも様々な可能性が見えてくると思えるからである。

今回はMYPカリキュラムを視野に入れた鑑賞活動ということがテーマであった。鑑賞活動は図工・美術科という教科の中の一部と捉えるならば非常に狭い範囲の学習である。しかし、これからは教科内の1つの領域についても、もっと広い視点から見っていくべきなのではないだろうか。今回の活動についても学年単位の行事という形で複数教科の活動を実現したわけである。おそらく、美術科という枠だけで考えていては実現はしなかったであろう。そういった意味でも今後はますます教科にとらわれない広い視野に立った活動を考える必要が出てくるのではないだろうか。

- 1) International Baccalaureate Organization, Middle Years Program Arts guidebook, August, 2000. 及び拙稿「国際バカロレア中等教育課程(MYP)芸術科についての基礎的研究」『美術養育学』第30号, 2009. 3, 191-200. 参照
- 2) 拙稿「国際バカロレアを視野に入れた美術鑑賞教育の実践研究-地域の美術研究を中心にして-」『東京学芸大学附属大泉中学校研究集録』47, 2007, 1, pp.23-59. 拙稿「国際バカロレアMYPを視野に入れた美術科カリキュラムの実践研究-米国中学校との交流授業と美術館での鑑賞授業を中心に-」『国際中等教育研究』第1号, 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要, 2007, 3, pp.31-72. 参照
- 3) 本活動の概略については東京学芸大学教育実践研究推進機構『平成18・19年特別開発研究プロジェクト報告書』「美術教育の可能性を開くー「双方向性」を視軸とした学びの構造からー」にデータを掲載している。
- 4) 東京都江東区お台場にあるパナソニックが運営する理系の教育施設。
- 5) Middle Years Program Arts guidebook, August, 2000 参照
- 6) リスーピアで活動した光の性質についての知識が、東近美での鑑賞活動に応用されたグループもあった。